持続可能な社会の構築のための教員養成・研修プログラムと教材開発
―地域学（「みうら学」）の開発を通して―

五島政一*, 山田真也**・益田孝彦**・檜垣　義久**・

*国立教育政策研究所, **三浦市教育委員会・

1

持続可能な開発と社会とは

「持続可能な開発」とは：「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすような社会づくり」（1987年の国連ブルントラント委員会報告「われら共有の未来」）

- 「持続可能な社会」とは：「戦争や紛争のない、すべての人が健康で文化的な生活を営み、貧困を克服し、健康衛生や質の高い教育が確保される社会」

2

ヨハネスブルク環境サミットで小泉首相の提案

ヨハネスサミットの課題

- 貧困の撲滅
- 持続可能な生産や消費のあり方
- エネルギー問題
- 水や天然資源の保全と管理（森林保護、生物多様性など）
- 砂漠化防止
- グローバリゼーションへの対応

日本がNGOと共に、「持続可能な開発のための教育の10年」を提案した。（５年間で2500億円以上の教育援助を提供）

（2002年9月2日／於：南アフリカ共和国ヨハネスブルグ）

総合的な学習の時間に行う。

3

持続可能な開発（発展）のための教育
Education for Sustainable Development (ESD)

- ESDとは：将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすような社会づくりのために貢献できる子どもを育成する教育

4

日本の教育との関連（「生きる力」の育成との関連）

- 「生きる力（自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する能力，自らを律しつつ，他人と協調し，他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力）」を育成する上で、以下のことに特に配慮する教育である。

5

学校教育でどのように

- 教科の中で
- 教科を通して（教科から発展的に）
- 総合的な学習の時間で（地域の利用）

・人権
・男女間の平等
・健康
・ガバナンス
・気候変動
・持続可能な都市化
・貧困の軽減
・市場経済
・平和と安全
・文化の多様性と異文化理解
・HIV/AIDS
・自然資源
・農村地域の変化
・自然災害防止と復旧
・生物多様性
・地域学

など・・・・（国際実施計画案2004.11より）

6

持続可能な開発のための教育としての「みうら学」

- Think Globally and Act Locally（地球規模で思考し、地域で活動する）な能力の育成が期待されているが、そのためには、まず、地域で活動するための地域教材の開発が必要である
- 三浦市教育研究所では、それらの課題を解決するために、三浦市総合計画の中に地域学「みうら学」を位置付けて、地域教材の開発、三浦市独自の総合的な学習を展開できる人材育成を3年間行ってきた

7

三浦市総合計画　～三浦　ニュープラン21　～で定義された「みうら学」

- 三浦市では，第4次三浦市総合計画を平成13年3月に発表した。この計画では，三浦市が目指すべき将来像とそれを達成するための三浦市固有の基本目標及び施策の大綱を明らかにしている。基本計画の中では，まちづくり政策の一つとして「一体感を育てる人材育成」を掲げている。これは，三浦市のことをよく知り，愛郷心や公徳心をもてる青少年の育成に向けて，市民が一体となって取り組む環境づくりを進めることを提唱している。その中の具体的な施策の一つに「『みうらっ子』を育てる義務教育の充実」があり，その基本方針として，次の3点があげられている

8

「みうら学」

① 地域の自然（環境），産業，地理，暮らし（社会、経済）のことなどを，体験を通じて学ぶ「みうら学」のカリキュラムを総合的な学習の時間等を利用して充実します。

② 地域における，体験学習の機会を充実します。

③ 各地域で取り組む個性的な「みうら学」を交換学習する学校間の交流を進めます。

- 基本方針①や③に出てくる「みうら学」を「地域の自然，産業，地理，暮らしのことなどを，体験を通して学ぶカリキュラム」と定義している

9

地域素材活用の効果

①物理的に身近である

②共通の生活経験が学習を加速させる

③地域に愛着を持ち，郷土愛を育成する

- 地域の身近な自然や生活環境を調べることで，地域の環境のよい面，悪い面を実際に体験で理解でき，地域のアイデンティティを認識でき，地域に対する愛着や誇りを持つことにつながる

10

教員養成プログラム

- 三浦市教育研究所は，地域の素材を生かした「みうら学」のカリキュラムや教材・教具を開発できる教員を養成するために，みうら学研究員を公募し，5名の研究員を任命した。そのプログラムは，国立教育政策研究所と三浦市教育研究所の連携によって開発され，研修期間は1年間で6回の研修会を行った。研修プログラムは，アースシステム教育の理念に基づいて計画された

11

研究経過

第1回（平成19年6月15日）
- 研究員会の目的と活動内容の共通理解
- アースシステム教育についての講話＜五島研究官＞
- 年間活動計画

第2回（平成19年7月10日）
- 各研究員の開発単元概要の検討

第3回（平成19年7月30日）
- 各研究員開発単元の検討

12

研究経過

第4回（平成19年8月28日）＜兼；教育研究所主催「総合的な学習の時間研修会」＞
＊講演「地域素材を生かした単元づくり」
～アースシステム教育の理念を取り入れて～＜五島研究官＞
＊公開授業研究会指導案検討
第5回（平成19年10月24日）＜兼；教育研究所主催「総合的な学習の時間研修会」＞
＊公開授業研究会
＊研究協議会
第6回（平成20年1月22日）
＊研究集録原稿の検討

13

研修成果（一芸の教員）

- 平成19年度は、「みうら学」として以下の5つの単元（カリキュラム）と教材・教具が開発された。

①単元名「三崎の名物　マグロ」
②単元名「テングサから心太　～地域に伝わる知恵を学ぶ～」
③単元名「三浦の砂」
④単元名「検地があった、三浦市にも」
⑤単元名「三崎の蔵の謎を探る」

14

15

どのように教員を養成するか

- 時間（年間6回：2時間から3時間）
- 資金（市内旅費）
- 内容（地域の教材化）
- 条件（校長承認、教育委員会主催）
- 証拠（実践してもらう）
- その分野の指導者（年間5人×6年間＝30テーマ）（中学校4校、小学校11校（合計15校））

16